

週に1回を目安にしているのですが、重症の場合は週に1〜数回行ってもOKとしています。なにより、とまっている排便を促して、まずは腹部膨満感を軽減させることが大切だからです。ただし、高圧浣腸も連日行うと習慣化して、浣腸なしで排便できなくなってしまうことがあるので、やりすぎはいけません。このあたりの見極めが必要になります。

最近診^みている患者さんの中で、アントラキノン系下剤を最高1日80錠服用していた人が、約2年かけて、1日10錠まで減量できた人がいます。現在は、おなかの張りがときどきあるくらいで、排便困難もあまりなく、あと5〜6カ月程度で、アントラキノン系の下剤から離脱ができるのではないかと考えています。

摂食障害を伴うケースの治療法

摂食障害を伴う場合は、食事のコントロールが難しいため、今までのケースのような腸内リセットや腸内クリーン維持法を行うことができません。

固形物を摂取するとおなか^は張ったり、食事そのものに抵抗があつたりするため、流動物しか取らない人、または、朝、昼はさほどでもなくても、夕方になるとおなか^が張るのが強くなるため、取るうとしても食事が取れなくなってしまうという訴えの人が多くいます。ま

た、体重が30〜35kgにまで低下しているケースもあるので、バランスを崩すと非常に危険な状態になってしまふことが多いのです。

しかも、摂食障害で体重が減少してしまうと、二次的に胃・腸の運動障害が起きてきます。そのため、腹部膨満感がさらに強くなるのです。

こうなると薬物療法だけの治療は難しいので、まずは心理療法や行動療法を専門医のもとで受けてもらうよう指導します。そこでは必要に応じて、腸に直接、栄養を補給する経管栄養剤（インシュアリキッド®）などの栄養剤の治療を受けてもらうこともできます。

心理療法、行動療法が始まったら併行して、薬物治療を開始していきます。しかし、あとで述べるように、患者さんの希望で先に薬物治療から始まるケースもあります。

具体的には、酸化マグネシウム製剤を使っていきます。服用量は今までのケースと同じ2gから始めます。従来服用していた下剤については、ある程度、服用を自由におかないと不安感が増強します。ですから、減量は本人の納得が得られた場合にのみ行います。逆に希望があれば増量、という方法をくり返していきます。これでうまくいかなければ、ラキソベロンという下剤（ピコスルファート製剤というタイプの大腸刺激性下剤。比較的副作用が少くない）をプラスします。

また、腹部膨満感を軽減させるために、希望により高圧浣腸（週に1〜数回程度）を行っ

ています。このタイプの患者さんが特に訴えが腹部膨満感ですので、これがなくなる
と、治療にも前向きになってくれる人が多くなります。

さらに、便意回復のために、新レシカルボン坐剤[®]を使います。同時にシャワー便座によ
る肛門刺激や、そのほかのマッサージなどの補助療法も無理のない範囲で併行していきま
す。食事療法に関しては、最初は水溶性食物繊維を含む流動食や飲料水を積極的に取るよ
うに
してもらいます。

これである程度効果が出てきたら、タンパク質、脂質、炭水化物をバランスよく摂取して
いくよう指導します。まずは、きちんと栄養を取ってもらうことが大切です。

摂食障害による栄養不良の症状が進行してくると、筋肉が徐々に崩壊していきます。そこ
で、特にBCAAを含有する食事を積極的に取ってもらうようにします。BCAAとは、バ
リン、ロイシン、イソロイシンという3種のアミノ酸です。

筋肉のもととなるタンパク質を構成するアミノ酸には20種類ありますが、そのうち体内で
合成できない9種類を必須アミノ酸といいます。必須アミノ酸の40%を占める特に重要なア
ミノ酸が、BCAAなのです。

しかし、こうした治療は一筋縄ではいきません。現在治療中の患者さんのケースを紹介し
ますと、まず、本人の希望で薬物治療から開始しました。酸化マグネシウム製剤や坐薬の治

療を試みましたが、「アントラキノン系の下剤はある程度減量できても、おなかが少しでも張ると固形物が取れない」といい、体重が32kgまで減少してしまいました。

そこで、専門医を紹介し、他医で心理療法や経管栄養剤などの栄養剤の治療を受けてもらい、こちらでは、筋肉の崩壊と上下肢の筋力低下を防ぐ目的でアミノ酸飲料の服用を勧めました。現在、なんとか心身のバランスを保っていますが、体重が30kgを切ってくると生命に危険が生じるので、油断できない状況です。

このように、摂食障害を伴った重い下剤依存症の治療は非常に困難であり、私も現在、改善策を試行錯誤で検討中というのが事実です。実際、食事が困難で入院治療が必要なケースなども多くあります。

また、摂食障害のかたには当然ながら、患者さんの納得のもと、あせらずに根気よく症状改善に向けて治療に取り組む姿勢が大事です。そして、家族をはじめとした周囲の理解も、必要不可欠になります。今後、医師も患者も本格的に取り組んでいかななくてはならないケースでしょう。